補足資料①若者ヒアリング

若者当事者ヒアリング

目的

困難な状況に置かれている若者が、いかにして地域の支援機関や「居場所」に繋がり、どのようなプロセスを経て回復や自立への一歩を踏み出すのか、その実態を明らかにする。
当事者の生の声を、今後の行政施策（相談体制の整備、居場所づくり、就労支援等）のヒントとする。

対象

A: 思春期から感覚過敏 ※によるしんどさを抱え、中途退学を経験。
数年間の孤立状態を経て、信頼できる家族の紹介で支援機関に繋がる。

B: 周囲への過剰適応 ※から教育機関在学中に心身に不調をきたす。
教育関係者の紹介を機に、地域活動へ参加。

C: 困難な家庭環境や摂食障害による苦しみを抱え、数年間「死を待つ」ような生活を送る。
家族が行政の相談窓口を訪れたことがきっかけで、支援員と繋がる。

D: 精神的な疾患を抱え、完璧主義から自傷行為や生活困窮に陥る。
外部のオンライン相談窓口から公的扶助の申請を経て、居場所に繋がる。

※**感覚過敏**: 視覚・聴覚・触覚などの刺激を過剰に受け取ってしまい、日常生活に支障をきたす状態。
※**過剰適応**: 自分の感情を抑えて周囲の期待に合わせすぎてしまう状態。

若者当事者へのヒアリングから

蜘蛛の糸

『信頼できる兄の紹介だったから動こうと思えた。これで行かなかったらチャンスを逃すなと思った。』
『大学の先生の紹介。ここで人と関われるとうになったら自分の苦しさにも変化が訪れるのではと思った。』

つながり続ける

『イベントやボランティアに根気強く誘ってくれた』
『自分がアクションを起こさなかったとき、「最近どうですか」とLINEくれた。このつながりを大事にしないといけないと思った。』

地域参加

『地域のイベントやボランティアなどやって、少しずつ自分にもできる、ということが積み重なった。』

安心感

『最初は緊張が強かったが、初めてこんなに話を聞いてもらえたと感じた。安心できる場だったので生きづらさを吐き出せた。』
『それまで過剰適応していた社会の圧が、北芝では感じずに自分の意志で振舞えそうな気がした。』
『できるできないが評価にならない』
『（SV）場全体が「特定の他者」。全部受けとめて次への応援をしてくれる。そういう関係性ができることで自問自答できる。』

自己選択

『亀の歩みだったが、次のステップを急かされなかった。選択肢は提示してくれるが選ばせてくれた』
『（SV）若者が何を期待してるんだろうと探ってくることに対して応えない。自分のやりたいことをやらないといけない』

若者当事者ヒアリング内容抜粋

▸つながりのきっかけ ——「蜘蛛の糸」

- **信頼できる「特定の他者」による媒介：**

「信頼できる家族の紹介だったから、チャンスを逃すまいと思えた」

「先生の紹介。ここで関われば何かが変わるかもと思った」

- **行政・相談窓口からの「橋渡し」：**

公的機関やオンライン相談など、既存の制度が「細い蜘蛛の糸」として機能した。

- **タイミングの重要性：**

本人の中に「このままではいけない」という微かな焦りや変化への願望が生じているタイミングで、適切な糸が垂らされる必要がある。

▸「居場所」が安心できる場所であるための要素

- **評価されない、急かされない：**

「できる・できない」が評価の対象にならず、次のステップを急かされないことで自分のペースを守れる安心感が得られる。

- **「過剰適応」を解く余白：**

相手の期待に応えようとしてしまう癖を出さなくても、咎められない空気感。

「自分が悪者になる感覚」が薄まり、自分と相手を冷静に振り返る時間が持てる。

- **受容的な関わり：**

初めて自分の話をじっくり聞いてもらえたという感覚。自己開示を受け止めてもらえる「特定の他者」としての場の存在。

若者当事者ヒアリング内容抜粋

▸「居場所」から「繋がりの継続」へ

- **適度な距離の働きかけ**：
  本人がアクションを起こせない時、支援者側から根気強く繋がりを絶やさないことが「この繋がりを大事にしよう」という本人の意欲を支える。
- **自己選択の尊重**：
  長期にわたる支援を継続し、次のステップを急かさない。
  支援側がゴールを決めず、本人が自分で選ぶ（自己選択）ことを尊重する姿勢が安心と継続に繋がる。

▸回復と成長のプロセス

- **「頼る力」の獲得**：
  何でも自分でできるようになることではなく、「できないところを頼らせてもらう」ことができるようになる。
- **成功体験の積み重ね**：
  地域の行事の手伝いやボランティアなどのスモールステップを通じ、「自分にもできる」という感覚が自信に繋がる。
- **感覚の変化**：
  対人関係や特定の空間に対する過度な緊張が、安心できる場での経験（ドキドキするが安心できる場）を繰り返すことで緩和される。
- **自己効力感の向上**：
  自分の体験を語る（自己開示）ことが、誰かの役に立っていると感じられ、自身の成長を実感する機会となる。

当事者の声から示唆される支援の在り方

若者ヒアリング

▶「特定の他者」としての機能

画一的な対応に留まらず、若者が「この人なら信頼できる」と思える継続的な関係性（特定の他者）をいかに仕組みとしてつくれるか。

▶「蜘蛛の糸」を多層的に

公的機関、教育機関、地域、家族、オンラインなど、あらゆる接点に支援への橋渡し機能を組み込むこと

▶「自己選択」を尊重する支援

支援者側がゴールを設定して誘導するのではなく、選択肢を提示した上で、本人の自己選択を待ち尊重する。

▶長期的な視点

緩やかな回復・自立プロセスを保証し、繋がり続けるための期間の定めのない支援の重要性

補足資料②視察報告

・とよの地域若者サポートステーション
・枚方市
・吹田市
・NPO法人パノラマ
・NPO法人サンカクシャ

視察報告　とよの地域若者サポートステーション（9/29）

■施設概要

とよの地域若者サポートステーション（サポステ）
豊中市「青少年交流文化館いぶき」3階

運営　：委託）一般社団法人キャリアブリッジ
体制　：キャリアコンサルタント、精神保健福祉士
心理士など資格を有するスタッフ
利用時間：月～金曜日、第三土曜日 10:00～18:30

対象：
- 15～49歳の働くことに踏み出したい人
  ➡厚労省の定め、氷河期世代に合わせた年齢設定
- 在職中の場合、退職日が決定している人
  週20時間以下の就労（雇用保険未加入）
- 在学中（休学中）の場合、退学が決定している
  卒業年度の1月以降時点で進路未定
  定時制/通信制高校在学中で、働く必要のある学生

利用者層：
- 就労意志はあるが準備が整っていない・職種が定まっていない
- 半分ほどは家族や社協からの紹介
- 残り半分は自分で来ることができる方（自立的・主体的）

写真・イラスト出典：とよの地域若者サポートステーション　HPより

視察報告　とよの地域若者サポートステーション（9/29）

■実施プログラム

▫個人面談と適性診断がセットのセミナー
▫職業興味チェックリストなどを用いた自己理解を深めるプログラム
▫コミュニケーショントレーニング（電話対応など）
　3ヶ月集中訓練（ビジネスマナー、パソコン操作、生活習慣管理）など実践的なプログラム
▫社会参加体験（農業収穫体験、林業、銭湯の清掃体験、地域の祭り、ヨガなど）
　→ボランティアなど、仕事に向けて段階的に自信をつけるスモールステッププログラのニーズがある
▫就職決定後の職場定着支援も実施。

■就労体験先開拓の手法

▫職員の個人的なつながりが主
▫デイサービスや介護など担い手不足の業界へのアプローチ
▫現時点では新規開拓より継続的なつながりのほうが多くなっている

■その他

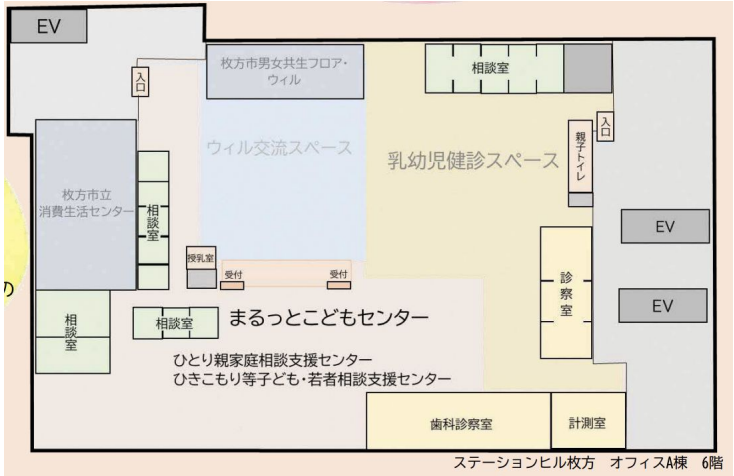
▫阪大学生相談室、キャリアサポートセンターとの連携
▫あくまで就労支援機関であり、居場所利用の想定はない

写真出典：とよの地域若者サポートステーション　HPより

視察報告　枚方市『まるっとこどもセンター』（10/1）

■施設概要

立地　：京阪枚方市駅直結（ステーションヒル枚方6階）
窓口名　：ひきこもり等子ども・若者相談支援センター
体制　：相談員5名（臨床心理士・社会福祉士）
＋居場所支援Co＋ボランティア20名程度
対象　：概ね15～39歳の本人・家族による自立に関する相談
利用時間：9時～17時半



▫母子保健～児童福祉の機関が集合した庁舎。
　SSWも同一施設にあり学齢期不登校等（本格的にひきこもる　前の段階）から連携可能。
▫「ひきこもり等子ども・若者相談支援センター」は、
　児童福祉～18歳以降を引き継ぐイメージ
▫H24年度の機構改革にて、子ども部局で若者支援施策を担　当することに。
▫40歳以降は別拠点の相談窓口（重層・生活困窮）につなぎ、　丁寧な連携を実施。

写真・イラスト出典：枚方市 HP・パンフレットより

視察報告　枚方市『まるっとこどもセンター』（10/1）

■相談体制

▫電話相談と面接相談。継続相談の中では必要に応じて訪問・同行支援を実施

▫【相談】【居場所】【家族会】の3本柱で実施

▫1回/2週 相談員会議を実施し困難事例等を共有し検討、4回/年SV

▫ひきこもりに特化し開所したため名称も「ひきこもり等」に

▫年単位での継続相談が多い

■相談実績（令和 6年度実績）

▫相談件数は延べ3800件　実人数275件（内新規ケース107件）

▫新規ケースの65%は家族のみ相談

　継続相談では本人および本人＋家族の相談が51%

　家族のみ相談から開始したケースも約半数は本人に繋がれている

▫相談領域は【ひきこもり】【不登校】【就労】についてが多い

▫コミュニケーションの状態についてなど独自の指標シートを使用。

　初回と年度末で変化度合いを10段階で評価し変化度合いを確認。

※あくまで相談員主観で一定程度継続的な支援が成立した対象に限る。

写真・イラスト出典：枚方市視察時撮影

視察報告　枚方市『まるっとこどもセンター』（10/1）

■**居場所（ひらぽ）について**

拠点　：枚方公園青少年センター和室

開催日時：1回2時間、月7～8回開催の**非常設型**

実施体制：居場所コーディネーター(謝金)とボランティア×2名程度

活動予算：参加者負担無し、生活困窮ひきこもり支援予算

活動内容：毎月参加者たちによる会議で決定

対象　：相談に繋がっている本人（居場所のみの利用は不可）

参加人数：5～7名／回

関連企画：女性を対象とした居場所を1回/月開催

（スタッフも女性のみ）

※開催日などの広報はしていない**クローズな居場所**

居場所希望の場合もまずは相談からスタートし必要に応じて利用を検討

写真出典：枚方市広報物より

視察報告　枚方市『まるっとこどもセンター』（10/1）

■居場所（ひらぽ）について

▫令和6年度参加者　実人数33名（延べ524名）

▫居場所利用する際は個別の方針により利用目的を明確に定めるため、【相談】が並行することで成立する（⇔ニーズが不明確だと利用しづらい？）

▫毎回居場所Coとの個別振り返りを実施。

　居場所で生じるストレスも実生活に活かす「経験」として面談で振り返る

　１回/半年に本人・居場所Co・担当相談員での三者面談も実施。

▫居場所Coは大学または大学院等で社会福祉、心理、教育分野等を専攻した人。

▫ボランティアは全20名程度（コアは7～8名）

　数年ごとに開催される養成講座の受講生から若者支援に理解と関心があることな　ど一定の基準に合う方が参加。

▫居場所の取り組みを広報する通信「ひらぽう」を１～4回/年程度発行。

　参加する若者が記事の企画・執筆などにかかわる。

　https://www.city.hirakata.osaka.jp/0000029278.html

写真・イラスト出典：枚方市広報物より

視察報告　吹田市『夢つながり未来館』（10/1）

写真出典：吹田市 HPより

■**施設概要**

立地　：阪急・大阪モノレール「山田駅」徒歩1分

施設名　：「吹田市立子育て青少年拠点
夢つながり未来館（ゆいぴあ）」

開館時間：平日　午前10時～午後10時
日曜・祝日　午前10時～午後6時

①のびのび子育てプラザ（1階）

②青少年活動サポートプラザ（2～6階）

→「子ども・若者総合相談センターぷらっとる一む吹田」　フリールーム、交流ロビー、相談室、会議室、
スタジオ、多目的ホールなどの設備

③山田駅前図書館（地下階）

★3つの機能を備えた複合施設

視察報告　吹田市『夢つながり未来館』（10/1）

2階：子ども・若者総合相談センター（ぷらっとる一む吹田）

■相談体制（市教育委員会直営）

体制　：相談員9名、居場所スタッフ2名
対象　：吹田市在住・在勤・在学の39歳までの青少年及びその家族
利用時間：月～土の10～20時

■相談実績

- 年間650件程度で約半数が新規相談。家族相談、SSWからの繋がりが多い。
  （課題解決、市外転居、3ヶ月連絡が取れないと終結扱い）
- 相談内容はひきこもり(108件)、不登校(142件)、進路・就労(108件)が多い。
  次に精神疾患、障害、保護者からの子育て相談、性格・対人関係について。
- 居場所利用だけでなく館内での社会参加支援（図書館清掃ボランティアや楽器メンテナンス）などスモールステップでの支援
- 家庭訪問、同行支援など施設外でのアウトリーチの実施
- 義務教育年齢は教育センターとリファーしあう
- 39歳時点で終結に至らないケースは暮らしサポートセンターなどに移行

写真・イラスト出典：吹田市 HP・パンフレットより

視察報告　吹田市『夢つながり未来館』（10/1）

■2階：フリールーム

▫<u>非常設型</u>で、<u>クローズドな居場所</u>として機能

　伴走型支援を前提とし、支援の1ツールとして使用

▫居場所スタッフ 2名在籍（非専門職）

▫週2回程度開所で、利用人数は3人程度

▫卓球、読書、創作活動などニーズに応じて自由な利用ができる

■3階：交流ロビー（指定管理）

▫誰でも利用できる学習エリア+ボードゲームで遊べる交流エリア

　<u>オープンな居場所</u>として機能

▫小学生～高校生、夜間帯は大学生年代の利用も見られる。

▫スタッフ5名程度がカウンターに常駐。

▫遊び道具を借りるときはスタッフに声をかける必要があるなど、

　利用者との交流からSOSに気づくための仕掛けがある。

▫ロビーワークから課題が発見され、相談（2階）につなぐ事案も。

➡2階の相談窓口と3階居場所との連携

写真出典：吹田市 HP・視察時撮影

視察報告　吹田市『夢つながり未来館』（10/1）

■その他（館全体）

▫市内在住・在学・在勤の方が利用可能

　１８歳未満若しくは高校生以下は**無料**で利用可能な **貸室の設備**

ex. 調理室、工作室、音楽スタジオ、多目的リハーサル室（ダンス教室などで利用）、多目的ホール（セミナーや講演会、スポーツなどで利用）

→2階相談窓口利用者が貸室を利用することも

▫ロビーDEカフェ、メッセージボードなど利用者同士の交流を促進するような仕掛け。

▫正月、夏休み期間には館内全体でのイベントを実施

→図書館併設、貸室設備などのハード面＋イベント実施などのソフト面における、子どもや若者が利用するフックの多さ

スタジオ

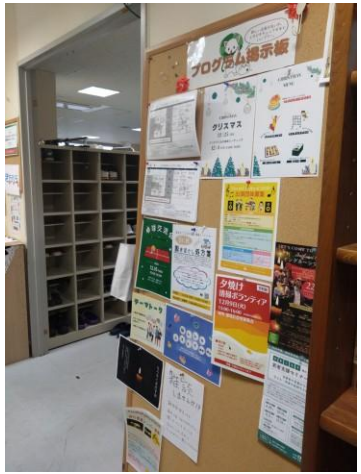
写真出典：吹田市 HP・パンフレット

視察報告　よこはま北部ユースプラザ（１２／１２）

■施設概要

立地　：横浜市都筑区
運営者：特定非営利活動法人パノラマ
対象　：15歳～39歳の若者（横浜市民）
内容　：思春期・青年期の総合相談や自立に向けた若者の居場所を運営
利用時間：11:00-19:00（月～土、水曜は相談のみ）

- 横浜市より受託しユースプラザを運営。（横浜市内に計4箇所ユースプラザあり。それぞれ異なるNPOが受託。）
- 同法人は、当時200人中70人が進路未決定で卒業していた神奈川県立田奈高校内での校内カフェから開始。現在は同高およびこのユースプラザ内にて、居場所および支援付き無料職業紹介（バイターン…バイト×インターンの造語）に取り組む。



■居場所

- 男女比：9対1

※現在、女性はほぼ0に近い。

- 個々のペースで参加できるもの（手芸、イラスト）
- 複数人で体験できるもの（音楽、スポーツ）
- 企画作りから取り組むもの（冊子の作成やバンドなど）

■支援対象の若者像

- 若者地域サポートステーションの1つ前段階の位置づけ。
- まずは外出機会や生活習慣、対人関係の練習が必要という段階のかたを支援ターゲットとしている。（サポステとの併用可）
- 利用者は不登校やひきこもり経験、親との関係性に課題あり、就労後ドロップアウト、発達の特性が見受けられる人など。
- 特に支援が必要と考えるリスキー層は、<u>経済的な理由で就職せざるを得ないのにもかかわらず、バイトなど未経験の若者</u>。その中には<u>中学生時代に不登校を経験し、定時制高校に通う若者</u>も含まれる。

視察報告　よこはま北部ユースプラザ（１２／１２）

■バイターンについて

- 職場見学と3日間の無給職場体験後に有給のアルバイトを行い、同事業所に就業、もしくは自身で仕事を探せる状態となることを目指す。
- 面接や書類選考が不要で、スタッフ引率のもとスモールステップで体験できることが利点。
- 就労困難層の壁「電話、履歴書、面接」対処として、従来の選考とは異なる「働きぶり」で能力・人となり事業者に見てもらうことができる。
- 就労だけがゴールではない。バイターン終了後も若者が受け入れ事業者とのつながりを継続し、地域との関係性が築かれることも成果と考えている。
- バイターンはあくまで就職への通過点であり、バイターンが長期になると初めての若者が居場所を利用しづらい・枠が空かないといった課題がある。

■その他

- バイターンにハードルを感じる若者のステップとして、職場見学や有償ボランティア（着ぐるみやポスティングなど）などの体験も重要。
- 有給になると仕事に責任が生じると感じ、有給に抵抗感を持つ若者も存在。
- 発達面や行動面などで配慮が必要な特性が見られる場合は、B型就労など福祉的就労につなげることもある。

■マッチングについて

- マッチングは仕事よりも若者本人のタイミングを重視。（無理に参加を促し挫折経験とならないよう配慮）
- 受け入れ先開拓にあたり、事業者には案内できる人が０人かもしれないことは必ず伝えている。
- 求人情報では読み取れない「情」（人や環境）理解のため、最初は職場見学から開始する。
- 最終的には勤務地や内容よりも体験先の「人」をポイントにバイターン先を決定する若者が多い。

視察報告　サンカクキチおよびサンカクスクエア（１２／１２）

■施設概要

サンカクキチで就労の話をしても仕事のマインドにならなかったため、サンカクキチと異なる場所に就労支援の拠点を設けた。

サンカクキチ
立地　:東京都豊島区上池袋
運営者:特定非営利活動法人サンカクシャ
対象　:15～25歳の若者
内容　:若者の居場所
利用時間:週4日(火・水・木・土)※ヨルキチ:第2・4金

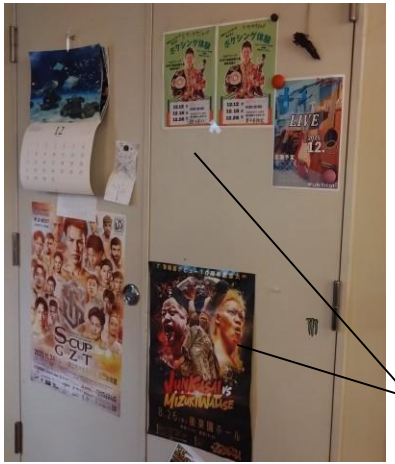
サンカクスクエア
立地　:東京都豊島区東池袋
運営者:特定非営利活動法人サンカクシャ
対象　:15～25歳の若者
内容　:若者の就労準備に特化した居場所

■利用者
- 男女比:6対4
  (女性専用の支援団体が複数あるためとの分析)
- 地方出身者が3～4割と地元に帰れない若者も多い
- 強いひきこもりというよりも対人恐怖、場面緘黙の若者や、若干非行系の若者などの利用がある。
- 新規相談の半分が本人、もう半分は役所、警察、他の団体からリファーされる。
- 近隣にある同法人が運営するシェルター利用者も来る。
  (シェアハウスも運営している)

視察報告　サンカクキチおよびサンカクスクエア（１２／１２）

■法人について
- スタッフは業務委託やアルバイトも多く、副業を可能としている。現役プロレスラーや吉本芸人の他、ミュージシャン、飲食ライターなど多様な人材が参加。
- 福祉・支援の色を出さず、フラットであること、スタッフ自身が楽しみながら取り組めることを心がけている。

■若者とのつながり方
- アウトリーチとしてYouTubeやTiktokを通じ広報活動を行う。利用者の友達が来ることも。



スタッフ自身（サンカクシャとは別）のイベント案内

■居場所の特徴
- プログラムを設けていないことが特徴。
- 開所時には無料で食事を提供。
- 金曜夜間（21時～5時）に「ヨルキチ」を実施
  ※金曜夜間に何かあっても窓口が閉まっており、週明けまで公的支援を受けられないため
- 利用にあたり、最低限の個人情報のみ確認。（家庭環境は登録時に確認必須ではない）が、その後は「好きなこと何？」から会話が始まり、ゲームなどで遊ぶ。
- 友達の家に来たような部屋作りとしており、若者に利用してもらえるよう、若者のニーズ、過ごしやすさを意識している。

機材や備品はIKEAなど企業からの寄付が多数。協力してくれそうな企業に連絡して協力を募っている。

視察報告　サンカクキチおよびサンカクスクエア（１２／１２）

■居場所の特徴

- 就労前提の（社会参画を促す）居場所
- 豊島区・UR都市機構と協定を結び、区画整理対象の空物件を活用し2025年7月にオープン
- 若者と地域、企業の大人が一緒に食事をし、交流できる場「サンカクキッチン」として週2回の飲食店営業や、若者の就労体験の場でもあるビストロ「ダントロワジュール」、居場所がない若者に向けた炊き出し「よりみちごはん」を行い、この場所で働く、もしくは仕事につながる活動をした若者にご飯を提供。サンカクシャ運営の飲食、清掃事業で働く若者もいる。
- 今後は同物件にて「サンカクオフィス」として仕事探しや資格サポートなどの就労支援カリキュラムを作る考え。

■就労体験について

- 職場体験先は、地域のつながりや各スタッフの紹介、企業連携担当による地道な営業活動により開拓。昨年度は経済同友会と連携する機会があった。
- 職場体験開拓先事業者の他、若者支援に賛同されるサポーター（事例では公認会計士のかた）からの仕事もある。

若者も炊き出しの準備中

※後日記事より
「よりみちごはん」は、サンカクシャが同曜日の21時から翌朝5時まで運営している、夜間の居場所「ヨルキチ」とも連動しています。住まいがない若者に対して食事だけで関わりを終えるのではなく、そのまま夜を過ごせる選択肢になるように動線を意識して運営。